

## コミュニケーションの基盤を支えるもの

和光大学学長 藤井 清



この夏の後半に、のべ2週間ほどでしたが、久しぶりに日本を離れ、しかもその半分ほどをハンガリーで過ごしてきました。最近の私の関心事の1つである物理教育に関する小さい集まりが、ハンガリーの研究者と私が関係している学会との共同主催で開かれるのに誘われたからですが、めったに行くこともないであろうこの国をちょっとのぞいてみたいという気持ちが大きい誘因になっていたことも事実です。会は首都ブタペストから東南東に80キロほど離れたヤスペレーニュという、普通の観光地図などには乗っていない小都市にある教員養成大学を会場に、そこに付設されているドミトリーに泊まって、相当に濃密なスケジュールで行なわれました。

本題とはそれるので、その内容には触れませんが、ハンガリー東部の大平原地帯の一角にあるこの町の中心部から1歩出れば、見渡すかぎりの畑、畑、日本では遠い昔に消えたニワトリの威勢のいい声が夜明けを告げ、8時ごろには決まって草や薪を積みとりに行く馬車のひづめの音が宿舍前の路上に響くという環境は、日本で機械文明に囲まれていた毎日を、一時、忘れさせる感がありました。東欧圏では独自の社会・経済体制を保ってきたとはいえ、農産物を除けば物質的豊かさには限界があり、紙の貴重さには普段、浪費し放題の私たちを反省させるものがありました。95年ぶりという、今年の日以上に残暑には閉口したもの（もちろん冷房の習慣はなし）、有意義な体験であったと思っています。

両国からそれぞれ40人ほどという小じんまりとした集りなので用語も日本語、ハンガリー語（マジャール語）、英語どれでもよいという気楽な会

でしたが、現地の人にはむしろドイツ語が通じやすいし、マジャール語で通常会話ができる日本人は1人か2人ということで、十分な意思疎通には時間も手数もかかりましたが、幸い話題は物理教育のことなので、特に教育用の物理実験の工夫などの演示が入ると理解も早く、まさに「百聞は一見にしかず」の実証版でした。

こうした現地での人的交流や日常生活の経験を通じて、事新しく言うほどのことでもありませんが、はじめにも触れたように不精の私には改めて肌で感じたことが2つほどありました。その1つは、ヨーロッパ全般で感じることですが、日本は近代化、現代化を急ぐあまり目新しいもの、便利なものの導入に熱心な一方で、古いものを未練気もなく捨ててきたのに対し、新しいものと古き良きものが一定のバランスをとっているのは魅力でした。変えたくてもできないという事情もあるのかも知れませんが、私たちはこうした行き方も参考にしながら、現代、特に将来のために、何を变え、何を残すべきについて適確な判断をしておく責任があると感じました。

今ひとつは、先にも触れたことですが、異文化、異言語所有者どうして共通理解を作りあげることの難しさでした。その対策は、語学的習熟もさることながら、2、3日も同じ人たちと顔を合せて、その人の考え方や思考パターンが飲み込めてくる言葉の1つ、2つは聞き損なってもほぼ正確な理解が可能になるという体験が教えてくれるように、相手の発言や行動の背景、その拠り所を適確につかむ努力が相互理解には重要だということ

実感しました。先に触れたように、物理教育の議論が実験方法や装置に関することではスムーズに進むのは、共通体験をもちやすく、それがコミュニケーションの基盤になるという好例だと思います。

こちらの発言、行動の前に、その根拠として、相手の状況、特に相手もっている判断、行動の基準をつかんでおくこととは、こじつけではなしに、まさに“OR的発想”であろうと思います。そして文化、民族が異なるような場合だけではなく、これだけ価値観、行動様式の多様化が進行している現代社会では、お互いの発想の基盤を確認し、評価し合うことが、相互理解の上で非常に重要だと思います。もちろん、ORの特長、威力は確率的モデルの場合も含めて対応の指針が数量的に示される点にあることは承知していますが、現代社会を生き抜くために、問題解決を進める有力な手段としての“OR的発想”になんじでおくことは有効だと思います。

私もこの3月までは学長職のかたわら本学の授業の一部を担当し、その中で、私にとっては副専攻になりますが、情報科学の講義ももっていました。そこでは現代社会における情報の意義やその位置づけについての認識を深めてもらうことを目的にすえましたが、その中で情報活用の一例として、ORも話題にとりあげました。そこでは、先にも述べたようなORへの評価の視点から、その個別手法の説明や応用例は別の専門講座にまかせ、情報を活用して問題の解決を図るうえでOR的とりくみが必要になってきた経緯や、有効性を発揮した事例について関心・理解を深めるように工夫したつもりです。解法のテクニックなどを知る以前に、解くべき問題のポイントやその解決方針、したがって利用可能な手法の見当がつけられることの方が重要と考えたからです。

しかし、この試みと関連して、この種のやや自然科学的な発想と手法に頼る考え方を文系学部の学生たちにキチンと理解してもらうには、一工夫

も二工夫も必要だとも実感しました。話が飛躍するようですが、大学設置基準の改正、学部教育での課程枠の撤廃に伴って、一般教養の科目の扱われ方が問題となっています。単なる専門教育のための基礎科目ではない、むしろ自分たちの選んだ専門分野をこれからの変動きわまりない未来社会の中で生かしていくためには、ときには予想もしなかった場面で自分の専門知識を展開する場合も予想され、そのための基盤としての幅広くしかも相当に高度な教養が必要だと思います。特に人文・社会科学系専攻の学生たちは、将来の官・政・財界の予備軍であり、彼らがいずれ当面するであろう未知の事態に対しても適確な判断や対処をせまられたとき、すべてを専門家まかせて、自分では科学的な意思決定の発想や手段に関心も理解ももとうとしないのでは危険だという気がします。自分でデータを処理し操作するまでの必要はないにしてもそのような処理を経て提供された資料の意味やその限界も心得たうえで、活用できる程度の基礎教養は必須だと思います。

さらに話を広げると、蛇足とは思いますが、情報処理の理論研究や実務処理にかかわる研究者、技術者の方々が、専門の研究や自分たちの後継者の教育、養成の問題だけではなく、社会一般に向けて情報処理の意義やORを含むさまざまな手法の効用、活用法についての理解・認識を深めるための努力を強められるよう期待しています。というのも、科学教育の分野では（今回のハンガリーでの議題の1つでもあった）非専門家のための教育をなおざりにしてきたことへの反省と将来への対応策が話題になっているからです。理解者、支持者の幅をひろげることが、将来の科学・技術の質的発展には欠かせないことのように思えます。